

第2章 アメリカ合衆国における盲ろう学生の高等教育支援

佐藤正幸（教育支援研究部）* 寺崎雅子（小田原市立病院）

1. はじめに

1990年7月に障害のあるアメリカ人法(Americans with Disabilities Act:ADA)が制定されてからは、障害のある人々に対する雇用の機会均等が叫ばれるようになり、それに伴い、障害のある学生の高等教育機関への進学も年々増加しつつある。アメリカ合衆国内において聴覚障害学生専門の大学は旧来から設置されており、1つは1864年に創立されたWashington D.C.にあるギャロデット大学(Gallaudet University)、もう1つは1968年に設立されたニューヨーク州ロチェスター市にある国立聾工科大学(National Technical Institute for the Deaf: NIID)である。前者は人文科学系の学部が中心で聾者及びその関係者のみが学ぶ大学であるのに対し、後者は工学系の学部が中心でロチェスター工科大学(Rochester Institute of Technology: RIT)の中に併設されている。今回、聴覚障害のみならず、視覚障害を併せ有する盲ろう学生の高等教育支援についても行なっている国立聾工科大学(National Technical Institute for the Deaf: NIID)を訪問(2004年11月8日~10日)し、盲ろう学生に対する高等教育支援の現状を調査したので報告する。

2. 大学入学までの盲ろう学生に対する支援

一般に大学における学習などの支援については、大学入学後に改めて構築されることが多いが、アメリカ合衆国では大学の選択及び大学入学する以前に、盲ろう学生については勿論のこと、あらゆる障害のある学生に対する支援が始まっている。まず、障害のある学生に限らず、全てに共通して言えることは大学に進学するにあたって、学生自身が高校に在籍している時から大学における自分自身の学習スタイルを考えておかなければならないということがある。これは、大学へ行きたいのか、何の目的で大学へ行くのか、何を勉強したいのかというようなことである。さらには、障害にある学生においては、自分の障害がどのような状況か、自分にとって学習及び生活上の支援は何が必要なのかについて客観的に説明できる技能が求められる。これは、同じ盲ろう学生と言えども、それぞれの障害の程度の状況及び必要とする支援の内容が異なるという考えが背景にあるものと思われる。また、これらは本人にとって不必要な支援の実行を防止する対策にもなる。しかしながら、高校の段階でこれらの技能を有する盲ろう学生は少ない。そこで、盲ろう者の支援団体であるDB-LINK、HELEN KELLER National Center、そして盲ろう者の支援団体ではないが全ての障害種をカバーしている National Clearinghouse on Postsecondary Education

for Individuals with Disabilities が、高校卒業時までには自分自身の障害、支援を説明できる技能を育てるために推奨する項目のリストを出し、いかに自分の障害の程度を説明し、自分にとって必要な支援を要求するかについての示唆を行っている。特に、Hammett(1994)⁴⁾は National Clearinghouse on Postsecondary Education for Individuals with Disabilities の機関紙 HEATH に、すでに大学に在籍している盲ろう学生からの意見を参考に”Strategies for Students to try”を出し、本人の立場から積極的に、具体的に大学など高等教育機関へ働きかけることを呼びかけている。

以下にその項目を記す。

もしある程度見えるのなら、大学側に大きな文字（大きなフォントサイズ、太字）での資料を要求しましょう。また、ノートテーカーには、太い黒マーカーペン（または黒のフェルトペン）を使ってもらうようお願いしましょう。そして、教室の前方に座るか、通訳者があなたの近くに立つかのどちらかになるでしょう。しかし、話し手に近づきすぎてもいけません。

もしある程度聴こえるのなら、教室の前方にすわりましょう。

もし通訳者を置くのなら障害者支援サービスプロバイダ及び通訳者とともあなたにあなたの言語、モード及び好都合なスタイルについて相談をしてください。

もし聴取支援装置（ALD）を用いるのであるならば、あなたにとって好都合な装置の種類を知らせて下さい（例えばコードレス FM システム）。

読みのための時間、宿題の提出期限、及び試験時間の延長を要求しましょう。眼精疲労を経験したり、ある一定時間しか読みのできない視覚障害のある学生にとってはこの方法は役に立つものです。同じように点字で読みを学習し、それ故に（与えられた）課題を完成させる及び試験を受けるにあたって時間延長が必要な学生にも役に立つものです。

フルタイムの状態で動くよりも、学期の始めに少なめの（余裕のある）履修単位を登録しましょう（これは前項の時間延長があることも考えて）。

あなた自身にとってテキスト、資料が確実なものになり得る時間の確保を行うために前もってリーディングリスト、シラバス、資料を要求しましょう。点字文書の作成には3ヶ月または6ヶ月を要し、特に大学では常にテキストが更新され、そして点字版が出されていない場合が多いのです。

あなたのニーズについて大学の学部、アドバイザー、通訳者及びノートテーカーによる自己擁護戦略を構築しておいて下さい。

これらのリストをみると、かなり学生の方からより具体的にニーズをアピールしていくべきであることを推奨していることが窺える。しかしながら、これらのニーズを要求された教員の方としてはかなりの負担になることは想像に難くない。特に事前に予習のための

資料が欲しいという要求とか、試験、宿題の提出の時間延長に関しては教員の方が負担になるので、その場合、通訳者、アドバイザーとともに教員に対して障害についての理解を求めていくことが大事であるということが考えられる。この戦略リストに限らず、様々な障害者支援に関する論文に共通してみられるのは、学生が自分の現状をどのように教員に自分で訴えるかという技能を早いうちから学生において育てていくことが大事であるということである。一方では Enos and Jordan³が Helen Keller National Center を通じて A Guide for Students who are Deaf-Blind Considering College を出しており、これは盲ろう学生が大学へ行く前に考えておいた方がよいリストである。これには例えば、どこに住みたいのか、何を勉強したいのか、どのくらいの授業を自分がうけることができるのか、教員と授業、学習のことできちんとコミュニケーションできるのかということを考える項目が含まれている。

このリストの一部を以下に示す。

1. 個別の学習形態

- ・ 学習する時、どの感覚（視覚・聴覚・触覚）での情報提供を求めますか。
- ・ 先生の話を見たり聴いたりする時、教室のどの場所が最も好都合ですか。
- ・ 授業を受ける時、先生は教室のどの場所に立つのが好都合ですか。
- ・ 通訳者を利用する場合、どの通訳者（口話・ASL(アメリカ手話)・手指英語・空書・その他）がいいですか。
- ・ 通訳者は教室のどの位置が好都合ですか。
- ・ 試験を受ける時、どのような措置（時間延長・別室受験・適度な照明・アメリカ手話に通訳する）を講じて欲しいですか。

2. 大学での学習プログラムを始めるにあたっての事前調査

・ 高校時代

あなたが好きな授業科目は何でしたか。その理由は

あまり好きでなかった授業科目は何でしたか。その理由は

何かクラブ・ボランティアをやっていましたか。

就職、ライフスタイルの見通しについてスクールカウンセラー、家族及び友人に相談したことがありますか。

何か職業体験・ボランティア体験をしたことがありますか。

職業リハビリテーションカウンセラーがいますか。

・ 職業リハビリテーションカウンセラーとの相談にあたって

これまで就職の見通しについて職業リハビリテーションカウンセラーと相談したことがありますか

就職の適性検査を受けたことがありますか

これまで自分にとって可能な就職の目標または大学での専攻を決めたことがありますか

ますか

あなたの就職を援助するにあたってどのような職業リハビリテーションを希望しますか。

奨学金制度を利用していますか。

・大学選択にあたって

(この項の最初に興味のあるもしくは希望する大学があるかどうか問う欄があり、その大学名を具体的に列記するよう求める項目がある。以下の問いはその列記された大学についてである。)

この大学には何人の学生が在籍していますか。

キャンパスの地図はどのように印刷されていますか(普通、拡大、触図)

寄宿舍がありますか。

どのような入学手続きが必要とされていますか。

(新入生オリエンテーション、カウンセラーの訪問、書類の作成など)

どのような入学選考が必要とされていますか。

(州規程の入学選考、PSAT、SAT,ACT、英語/数学の到達度試験、その他)

短大から4年生大学に編入の際に試験がありますか。

どの学位プログラムがありますか(準学士レベル、学士レベル、その他)

学年暦はどのスタイルですか(2学期制、4学期制)

大学はあなたのニーズに合わせた障害支援サービス部門を設けていますか。

あなたの希望する大学を訪問したことがありますか

盲ろう学生と話をしたことがありますか

大学にいる他の障害にある学生と話をしたことがありますか。

大学は(卒業後の)進路決定のための相談部門を置いていますか。

大学は学生に対する学習支援部門を置いていますか。

・キャンパスについて

何人の学生が入る講義室ですか。

照明はどんなタイプのものですか

講義室においてまぶしさの元となるものはありますか。

講義室では補助機器(拡大読書機など)を使用できますか。

講義室の机の配置はどのようなタイプですか(U字形、講義室スタイル(机付き)、劇場スタイル(机無し)、サークル)

講義室にはどんな視聴覚機器が設置されていますか(OHP,ビデオレコーダ、マイククロホン、同時字幕装置、その他)

講義室にはどんな聴覚支援装置がありますか(FMシステム、赤外線システム)

講義室では騒音の干渉を受けますか。

キャンパス内の移動において、照明は適切ですか
あなたはキャンパス内を難なく移動できますか。

・ 寄宿舍について

寄宿舍スタッフにあなたがコミュニケーションできる人がいますか。

寄宿舍に緊急時の警報を発する装置がありますか

寄宿舍ホールの照明はあなたのニーズに対応していますか。

明るさを調整することができますか。

どのようなテレコミュニケーション機器が利用できますか

(TTY、テレブライル、テレホン増幅器、コンピュータモデム)

寄宿舍の方針及び規則に関する情報がどのような方法で提供されていますか

(拡大文字、点字、朗読テープ他)

ルームメートは指名することができますか。

何人部屋ですか。

その他、通訳サービス、ノートテーカー、朗読サービス、チューター、ボランティア、拡大文字、図における資料、点字資料、朗読テープによる資料、拡大読書機、歩行及び移動支援サービス、公共交通機関、カウンセリング支援サービスなどの項目が設けられており、盲ろう学生が自分の進路、特に大学を選択する上での指標となるべき項目を、大学のみではなく、大学周辺(例えば寄宿舍など)を含めながら取り上げているのが特徴である。

3. 入学後の盲ろう学生のための支援

通常、盲ろう者に関わる場合、触手話などでただ会話を通訳する通訳者(interpreter)という形で関わる人が多いと考えられているが、盲ろう者の通訳を勉強する最初の基本がガイディング(guiding: 手引きが主体となるが、事例に応じて「今人が入ってきました」とかいうように周囲の今の状況を伝えるというような状況通訳も含まれる)であることから、単なる会話などの通訳に留まらない。実際に通訳を含めた盲ろう学生の支援に従事しているスタッフらは自分たちを interpreter と呼ばないで intervenor (仲介者または介入者) と称している。これは比較的新しい用語で、現在、どのように役割を持たせていくかという点で盛んに議論がなされている。また intervenor が生まれた背景には、これまでよく言われていた通訳者(interpreter)もしくは supporter という言葉が「してあげる者」、「してもらう者」との関係を作ってしまう、対等にニーズを理解し合えないという状況が出てくる。この intervenor は盲ろう学生と盲ろう学生を支援する立場のものがお互いに対等の立場で理解し合えるようにするという意味も込められているとされている。

Olson(2004)⁶⁾はこの intervenor の役割について、次のように述べている。

intervenor は、介護者(caregiver)、授業補助員(teaching assistant)、または通訳者(interpreter)の役割と同じような役割を全て担う、しかし、彼らが、どのようにこれらの役割を担うのか、どのようにして盲ろう者に情報を提供するのかという点について大きな違いがある。

この大きな違いというのは、前述の通り盲ろう学生に関わる intervenor はガイディングが基本となっており、さらには、盲ろうの状況が個々人で大きく異なることから単なる介護者(caregiver)、授業補助員(teaching assistant)、または通訳者(interpreter)で終わらないということを意味していると思われる。

次に intervenor が盲ろう学生に介入する際に、重要な課題があるといわれる。これは、以下の4つであるといわれている。

- 1 . (予測：anticipation) すぐに起こりうること、かなり先のことについてどのように盲ろう学生に伝えられるか。
- 2 . (動機付け：motivation) 盲ろう学生の目標は何か。それに自分自身は適応する必要があるだろうか。
- 3 . (コミュニケーション：communication) 介入活動を通じてどのようにして盲ろう学生をコミュニケーションが図れるか、いつ盲ろう学生と感情を出す機会を持てるか。
- 4 . (確認：confirmation) (学習)活動が終わるまでの盲ろう学生の活動の成果及び、その活動がうまくいったかどうかについて本人にどのように伝えるか。

Olson(2004)⁶⁾は、intervenor 養成には、これらの4つの課題を取り入れて行なうことが重要であることを強調している。

4 . 聴覚障害のある学生における視覚の問題に関するスクリーニング及びその後の支援の重要性

大学入学時点ですでに盲ろうであると障害認識している場合は別として、聴覚障害のある学生として大学へ入学したがその後、目に問題があると気づくもしくは本人は自覚していないが、周囲が本人の目に問題があるのではというように気づくケースが近年増加しつつある。Demchak and Elquist(2004)²⁾によれば、聴覚障害のある学生の3-6%は生来的に視覚に特別なニーズを要するとも言われるアッシャー症候群に罹患している学生がいるとも言われている。また、視覚において生来的に問題がなくても聴覚障害のある学生については、聴覚に障害があるとわかると、コミュニケーション、学習、生活などの面において曖昧になりやすい聴覚情報よりも彼らにとって確実な視覚情報にシフトすることが多く、視覚の酷使によって視覚障害を有する結果に至る場合も少なくない。

一方で、聴覚障害のある学生に関わる教員についても、聴覚障害に関する配慮についてはかなりの高水準で行なっているものの、視覚障害についてはほとんど配慮を考えていない者が多い。このような状況を鑑み、前述の Demchak and Elquist は、ある特定の時期(こ

ここでは大学に入学する前後が考えられる)を設け、聴覚の管理のみならず、視覚に関する問題を有するか否かに関するスクリーニングを行なうべきであると強調した。さらに、聴覚障害のある学生に関わる教員及び関係者についても、聴覚障害支援に関する研修のみではなく、視覚障害に関する理解及び支援に関する研修をおこなうべきであるとした。

そこで、スクリーニングによって視覚に問題があるとされた学生については、将来的に完全に盲ろうとなる可能性も否定できない。その場合、学生自身がヘレン・ケラー財団に出向き、住み込みで生活基盤的な技術の訓練を受ける。例えば、どうやって自分で料理を作るかの訓練、点字の読みの訓練、目が見えなくなっても自分で方向がわかって自分で動けるようになる訓練、白杖を使う訓練を受けるというものがある。さらに講義については intervenor が、担当教官のところへ本人と共に outgoing、この学生は今はある程度みえるが、徐々に進行していったらほとんど見えなくなる可能性があること、最初は拡大文字の印刷物がよくて次に進行した場合は点字に移行した方がよいこと、スクリーンを使う場合はその学生に近くにおくこと、進行した場合は触手話が必要となることを説明し、理解を求めている。

5 . 国立聾工科大学(National Technical Institute for the Deaf: NIID)

今回訪問した国立聾工科大学(National Technical Institute for the Deaf: NIID)は、ニューヨーク州ロチェスター市にあり、ロチェスター工科大学(Rochester Institute of Technology: RIT)の中にある8つの学部(college)の1つとして位置づけられている。創設は比較的新しく、1965年に Johnson 大統領がアメリカ公民法 89 条 36 項の規定に基づいて国立聾工科大学の創設に署名したことから始まる。現在、約 1,100 人の聾学生がロチェスター工科大学の約 13,000 人の学生と共に学んでいる。

筆者らが訪問した当時、国立聾工科大学には盲ろう学生(徐々に視覚障害が進行している学生を含む)が40人おり、ほぼ全米から入学してきている。そのほとんどがアッシュャー症候群によるものである。そしてごく少数ではあるがサイトメガロウィルス症候群、CHARGE 症候群(軽い知的障害を伴う)の学生も在籍しているということであった。

前項でも述べたように、聾学生の一部には国立聾工科大学に入学後、自分自身が視覚に問題を抱えていることに気がつくことが多いという現状から、早くから Eye and Ear Clinic が国立聾工科大学内で設置され、視覚及び聴覚におけるケアを行なっている。

今回の訪問調査にあたって、国立聾工科大学 PEN-International ディレクター DeCaro 教授、テクニカルスペシャリスト Yoshida 氏、Eye and Ear Clinic コーディネーター Wallber 教授、シラキュース大学大学院博士課程生 Arndt 氏の多大なる協力を得ました。特に Arndt 氏には資料提供、インタビューに快く応じて頂きました。厚くお礼

申し上げます。

本調査は科学研究費補助金基盤研究B「「盲ろう二重障害」インターネット教員研修システム構築に向けた調査・開発研究」(研究代表者：中澤恵江)の助成を受けた。本章は、独立行政法人国立特殊教育総合研究所「世界の特殊教育 第19巻」に掲載されたものである。

文献

- 1) Arndt,K.: Concerns of college students who are deafblind. DB-LINK International,2004.
- 2) Demchak,M. and Elquist,M.: The importance of screening for vision problems in children with hearing. Nevada Access, Fall, 12- 13, 2004.
- 3) Enos,J. and Jordan,B.: A guide for students who are deaf-blind considering college. Hellen Keller National Center, (発行年不詳)
- 4) Hammett,R.:Deaf-blind students on campus. HEATH National Clearinghouse on Postsecondary Education for Individuals with Disabilities, 13,3,1994.
- 5) King,S.J.,DeCaro,J.,Krachmer,M.A. and Cole,K.J.: College and Carrer Programs for deaf students.11th Ed. Gallaudet University and Rochester Institute of Technology National Technical Institute for the Deaf,2001.
- 6) Olson,J.:Intervenor Training.Deaf-Blind Perspectives,12、 Fall,2004.

* 執筆当時：独立行政法人国立特殊教育総合研究所 教育支援研究部